

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

五感を研ぎ澄ませてホワイトアウトの八甲田を歩く

今年の連休後半は信高山岳会の例会山行で、松田大さん、沼田陽子さんとともに八甲田山・岩木山での山スキーに出かけてきた。青森までは、松本から 900 km 弱。渋滞に巻き込まれながら、13 時間かけて酸ヶ湯温泉に到着したのは 3 日の午後 8 時 30 分。八戸工大一高の樋口寿昭先生が出迎えてくれた。我々に情報を提供するためにわざわざ足を運んでくださり、長いこと待っていてくださった。連休中は寒気が居座った日本列島。青森に入るころから雨が降り出し、酸ヶ湯に着くころはみぞれ交じりのガスの中。明日の仕事があるからとお帰りになった樋口先生を見送ったあとは、テントを叩く風雨を着に安着祝い。酸ヶ湯温泉の駐車場は満車状態だが、我々のような貧乏キャンパーは少数派だった。

4 日は、酸ヶ湯から大岳循環ルートをたどって北八甲田に登ることにした。ほとんどの登山者が仙人岱避難小屋を目指す中、8:40 過ぎ、敢えて我々は大岳避難小屋を目指した。前日からの雪でトレースは消えているが、およそ 30m おきに立てられた高さ 3m ほどの竹竿がルートを教えてくれる。しかし、大岳避難小屋への最後のトラバースあたりからガスがひどくなり、同時に竹竿が倒れていてルートがわからなくなった。地図とコンパスさらには GPS と首っつけ。土地勘がない上に、広い尾根上なので慎重に読図しながら進んだ。大岳の避難小屋に着いたころは、風も猛烈で湿った雨が身体を濡らす。県営の小屋らしいが、トイレまで備えた立派な小屋のたたずまいにびっくりしながら中に入ると、飛騨山岳会のパーティが先客だった。この風では頂上は断念するという飛騨の面々が下ったあと、松田さんと二人で頂上に向かった。道がわからないので、小屋から頂上に向かってコンパスを使ってのホワイトアウトナビゲーション。樹林が切れて風はいよいよ吹き荒れ、耐風姿勢をとってもこらえるのがやっと。ちょっと気を抜いたら風に転がされた。標高差でおよそ 150m、30 分ほど登りきると、凍り付いた大きな道標が頂上にはあった。

小屋に戻って、沼田さんと再合流し、大岳の東面を巻いて仙人岱へ向かう。こちらはこれまでも増してルートがわかりにくかった。およそ 1 時間歩いて 13:45 に仙人岱避難小屋に到着。小屋には酸ヶ湯から登って来た登山者が 30 人ほど。我々も入れてもらい、暖を取り、空腹を満たしてから、郷に入れば郷に従えと、ここで情報を仕入れたのが、大間違いの始まりだった。「ここから地獄谷を下りたいのだが」と、その場をとりしきっていた初老の男（我々は彼が管理人だと思ったのだが、あとで聞くと勝手に避難小屋に住み着いているという・・・これもまた奇妙な話だったが・・・）は、スキーに自信があるのならぜひ地獄谷を下りなさい。竹竿もあるから迷うことはないと言った。

情報を仕入れた我々が小屋を出て、さあ後は下るだけとスキーを装着していると、小屋の中において我々の会話を聞いていた 15 人ほどのパーティを率いるガイドがつかつかと寄って来た。曰く、「地獄谷はボトルネックになっているところで、いったんスキーを脱ぐことになる。硫黄尾根を下った方が得策だ。さっきのじいさんはスキーで下ったこ

とがないからああ言っている。硫黄尾根はいずれ地獄谷と一緒になるし、こちらも竹竿がべた張りで迷うことはない。」とのたまったのである。よく地図を見ればすぐわかるのだが、硫黄尾根の方角から地獄谷に向かうには相当早い段階で西に向かわねばならない。しかし、相手がガイドであることで全く疑いもなく信じてしまった上に、視界も利くようになり、竹竿はおいでおいでと我々を導く。それを鵜呑みにした我々がバカであった。それまでは、五感を研ぎ澄まし、細心の注意を重ねてルートファインディングをしてきたのに、地図も確認せずに一気に下って車道にぶつかったところで様子がおかしいのに気が付いた。なんと全く方向違いの睡蓮沼へおりてしまったのだった。しかも下り自体もほとんど面白味がなかった。やはり、信ずるべきは自らだと半ば腹立たしさを抑えつつ、今頃は温泉につかっているはずなのにとこの日一番のアルバイト、4km以上の雪原歩きをして酸ヶ湯に到着したのは16:00だった。一体あのガイドは何だったのだ！

岩木のおろしが吹くなら吹けよ・・・岩木山大滑降

翌日は、岩木山に登った。昨年まで青森県高体連登山専門部の蒔苗さんに連絡をとったところ、お付き合いしていただけたのはラッキーだった。百沢スキー場から9時15分発のバスに乗り込み、岩木スカイラインを一気に登る。連休中に限って運行するこのバスのおかげで8合目(1250m)まで登れたのも大きなメリット。朝から降り出した小雨は止んだが、それでも風は強い。駐車場から鳥海山までのリフトは動いていなかったのので、スキーを背負ってリフト下をまっすぐに登りあげた。鳥海山から見上げると岩木山は迫力がある。避難小屋にスキーをデポし、頂上は断念するという沼田さん、先に下るといふ蒔苗さんの弟さんと別れ、蒔苗、松田、大西の3人で頂上に向かう。火口を右下に臨みながら、鳳鳴ヒュッテを経て弥生コースのエントリー地点を超えると風の勢いは強くなった。独立峰ゆえ、やはり風は強い。しかし昨日とは違い遠望はできないまでも視界は利く。鳥海山から見る限り、アイゼンが必要ではないかというように見えたのだが、蒔苗さんの言うとおりの雪は固くなくて、兼用靴でもなんの不都合もなかった。言わずもがなであるが、昨日のガイドと違って今日のガイドは信用に足る。11時25分山頂着。猛烈に吹く風に耐えながら記念写真を撮る。あちらが遠く北海道、手前が津軽半島、十三湖、目を転じると白神山地・・・があるということだが、残念ながら景色を堪能することは叶わなかった。しばし頂上に滞在し、一息で鳥海山まで下った。



避難小屋で腹ごしらえをして、いよいよお楽しみの大滑降である。下るのは蒔苗さんお薦めの標高差1180m、全長5500mの百沢コース。「岩木のおろしが吹くなら吹けよ！山から山へと我らは走る！」のメロディが頭の中をぐるぐる回る。下るにつれ足が重くなるが、「煙たてつつ、おおシーハイル！」と、歌のままの山スキーの世界。この時期にスキー場の最下部まで雪がつながっているのはラッキーとのこと。青空もとの春スキーとはならなかったが、地元の人にしてこの連休中では最もよい天気という中、岩木山からの吹き降ろしの風を十二分に感じながらの大滑降だった。案内して下さった蒔苗さんには感謝、感謝である。下れば、弘前の町は満開の桜に彩られて、桜まつりの真最中。行きがけの駄賃と桜も満喫した。かくして、津軽への小遠征、二山に登り、無事終了。

